祝　辞

練馬区長の前川燿男です。本日、成人式を迎えられた皆さん、真におめでとうございます。74 万区民を代表して、心からお祝いを申し上げます。

私は皆さんを見ていると、大学に入学した頃を思い出します。1964 年、大学に入って、東京に出て来て、大学の寮に寄宿しました。18 歳の私は、友人とよく満天の星空を見上げながら、21 世紀まであと 30 数年、その頃に自分は何をしているのだろうと空想していました。信じられない事に、今はもう 21 世紀も 22 年目に入っています。結果的には、50 年にわたり、公務員として仕事をしてきました。

私の父は鹿児島の中農の次男、生家を出て、一生警察官として働きました。職務に忠実、責任感が強く、最後に小さな田舎町の署長を務めました。不正を憎み、清貧を誇りに、贅沢に全く縁の無い暮らしを続けた、典型的な日本の公務員でした。私は、その父の背中を見ながら育ちました。

明治の初め来日したヨーロッパ人が手記に残しています。他のアジア諸国での経験に倣って、入国審査を早く済ませようと職員に金を渡そうとしたら、その手を払い除け、日本男児と胸を張ったそうです。父のような公務員が全国津々浦々に多数いて、近代日本の発展を支えたのです。

公務員として全体の奉仕者であること、これこそが、公務に従事する者の誇りです。私は、永く公務に従事してきましたが、何時も、公務員としての誇りを胸に刻んで、恥ずかしくない生き方をしようと努めてきたつもりです。人間が与える人の世の爵位、公爵や伯爵などの人爵ではなく、天が与える爵位、天爵こそが重要と、自分に言い聞かせてきました。

公務員だけではありません。企業に勤務していても、自営業であっても、仕事を通じて、公の為、社会の為に働く事を生き甲斐とする市民、ミニ渋沢栄一が日本には大勢いました。世の中の何処にいても、自分の足で立って、社会を支える自立した人間が沢山いました。その伝統は、今も我々のなかに生きています。

明日の日本を担うのは若い皆さんです。私と力を合わせて、コロナ禍を克服して、日本の未来を切り拓いて頂きたい。私も皆さんと一緒に全力を尽くそうと考えています。

大人への道を歩み始めた皆さんお一人お一人の人生に幸多かれと祈念して、お祝いの挨拶といたします。本日は真におめでとうございます。

練馬区長　前川　燿男